

永遠瑠マリールーズさん講演



2月10日(日) パストラルかぞ
主催 一般社団法人すくすく広場
後援 加須市 加須市教育委員会
加須市社会福祉協議会

「大切なもの 命・平和・教育-子どもたちの未来のために」 ～ルワンダの悲劇から学んだこと～

みなさんこんにちは。出会いが出会いを作ってくれました。生きていれば一番の宝物が出会いです。久喜からの倉持さん、関口さんに出会って、戸恒さんとなつながつてすくすくの講演会に招待されました。この出会いを宝物に変えたいなと思います。大切なもの=命、毎日感じてらっしゃると思うんですが、脅かされることが無い中で、平和教育として子供たちの未来のために、伝えていきたいと思います。どこへ行ってもこのスライドから始まります。

全ての子供が学校に行く日本

ルワンダの場所分らないですよ。日本へ26年前に来て、ショックだったこと、小学校の時に世界地図を見て、アジアの三つの国 日本・中国・インドを知りました。日本に驚いた。すべての子供が学校に行く。ルワンダでは、すべての子どもたちが学校に行けるわけではなかった。分かるか分からないかによって進学できるかできないか。留年させてくれる親はいない。しっかりと覚えました。日本の島は「いくつに分けられていますか」その四つ。それを名乗ってくださいというように、暗記するのが主な学習。日本の地理。中学生の時に、日本の歴史を学びました。世界的に知られていることとして、広島・長崎の原爆、中学一年の時に学びました。戦争の残酷さを学びました。広島・長崎で原爆が落とされたとき、子供はどうしていたか。

気候も食べ物も素晴らしいルワンダ 内戦を乗り越えた今ぜひ来てほしい

ルワンダは発展途上国で日本とは約五十年の交流があります。ルワンダの銀行もその一つです。1985年高校卒業して初めての銀行振り込みを受けました。日本によって作られた制度です。日本からのODAの支援を受けています。バスが主な支援です。日本の皆さんもルワンダのことを知っているだろうと。一目見てどこですか。ルワンダと言う

と、衝撃。「どこにあるの?」こんなに日本のこと知っているのに。何事もなければ分からない。ところが、26年前来て、みんな知らなかったのに、大虐殺の後「あれ何族ですか?」。虐殺の国になった。寂しいです。いいルワンダを紹介して皆さんに来てもらえるようにしたいです。この会場にも5人ルワンダに来ていただいている。来年はぜひ大勢に来ていただきたい。赤道直下でも快適です。赤道より南、ウガンダ、タンザニア、飛行機で一時間。キリマンジャロのコンゴ民主共和国の隣りです。四国の1.4倍。福島県の2倍。住んでいる人数1100万人。人口密度429人、ヒトヒトヒトです。産業は主に農業です。鋤で耕す農業。気候はとっても恵まれています。夏になると暑いと思うでしょう?福島で初めて30度体験しました。ルワンダではせいぜい、25~27度、昼間は22度。標高1000m~2500mなので、気温は快適です。坂の国でもあります。アカグラ国立公園に野生動物がいます。行っても、会えたり会えなかつたりです。動物ですから。マウンテンゴリラツアーが一番人気があり、高価です。飛行機代分の予算ぐらいかかります。それだけ、保護されているわけです。美しくおいしい食べ物があります。豆を使った料理やお芋の料理、バナナ料理です。お米も食べられますが、高いです。日本で毎日ご飯を食べられて幸せです。美しく、素晴らしいものがあるルワンダですが、25年前大虐殺がありました。もともと王国だった。言葉が一つ。ルワンダ語しかなかったにもかかわらず、民族争いは、言語の違いが当てはまらない。食文化も変わらない。結婚も変わらない。結納は牛一頭と決まっている。すべて文化同じ。違いは、権力争い。王様の指導でまとまっていた。ところが、植民地支配になりました。最初ドイツ。ドイツはこの国の制度を尊重した。ところが、第一次大戦にドイツが負けた。次はベルギーの植民地になりました。そしたら統一から分裂に進んでしまいました。信じられない分断政策。鼻の高さで民族が違った。財産で民族を変えた。背の高さ低さ。さらに兄弟同士でも別民族。政策として発行した身分証明書や所属の証明書。これらの証明書が殺される基準になってしまった。それから言葉。フランス語を導入することで、王様とエリートが学ぶ権利を作った。フランス語を学ぶことで溝が深まってくる。ルワンダを分けてしまった。独立の時にベルギーに1959年に王様が倒されてしまう。悪口を広められて、選挙で負けてウガンダに逃げた。サポートする人達も逃れてしまった。国には帰りたい。みんなも国に帰りたくても帰らせてもらえなかった。難民生活になってしまった。愛国戦線というゲリラ組織ができて、1990年10月1日から入ってきた。これが内戦の始まりになりました。戦いをしているときに和平交渉に参加することを勧められる。1990~1993年に交渉が失敗。1994年大統領が和平交渉に参加して、まとまって、合意があった。書面までして。ところが大統領が乗った飛行機がミサイルで撃墜された。一瞬に二人の大統領が殺されてしまい、犯人が未だに分かっていない。1994年4月7日から大虐殺が始まった。そのニュースは全世界に広がった。三か月間五十万人から百万人の犠牲者。政治のあおりで、仲良くしていた人が殺し合う。今現在復興が成し遂げられていますが、ルワンダの女性が大きく関わっています。世界的にも女性国会議員が多い国。世界中に知られている。今は安心してお出かけできる国。今日は皆さんが聞きたい体験をお話しします。

ホームステイで覚えた日本語

今、53歳。大変なことを乗り越えると、素晴らしい出会いがあります。日本語ができるきっかけは、高校卒業して、専門学校で教師になった。洋裁を教えた。小学校卒業できる子供は少ない。多くは、途中で学校をやめていく。一人歩きできるためには、色々な勉強ができる場所が必要です。日本のODA、人材育成の一環として、青年海外協力隊。20歳になった若者が生活しながら技術を教えるジャイカの制度。協力隊として、働いて日本に来る制度があって、日本の技術指導を26年前に受けられた。行くことは考えられなかった。神様が私たちを助けるために行かせてくれた。その時は九か国から集まった。福島への受け入れ先。福島行ったらフランス語・英語を教える先生はいなかった。「三か月は自分で日本語を学んでください」と言われた。日本語学校へは毎日通った。その中で、ホームステイが人生を変えた。幸せだった出会い。八十歳の彼女は愛情たっぷり。厳しく。彼女は、二か月間で日本語しゃべれるようになることを県に約束したんでしょう。最初は『どうやって暮らすんでしょうか?』一晩は何もしゃべらなかつた。『明日どうなるんでしょう。』朝の目覚めの驚き。朝こたつに座って朝刊を呼んで見た。感動した。ビックリした。複雑な気持ち。想像してほしい。受付を済ませた皆さん。もし文字が読めなかつた自分を想像してみてください。私はおばあちゃんが読んでいるのを見てすごい複雑な気持ちでした。私は、母から53年間手紙をもらったことが無い。95年間文字の読み書きができない。今の私たちは、文字に支えられている。読みたいことはスマートフォンでダウンロード。本は国境を越えてどこでも行ける。だけど、これを味わっていない人は多い。『母も読めたらいいのになあ。』と心でつぶやいた。そこで私は、一生懸命日本語を勉強しようと思いが入った。とことんおばあちゃんは付き合ってくれた。日本では、学校で、一人ずつ教科書を配られた。子供のようにうれしくてはしゃいだ。母国で、高校まで卒業しましたが、自分の教科書は初めてだった。ルワンダでは、先生だけ教科書を持っていた。まとめて黒板に書く。ノートに写す。全部の子供にノートはない。無い子は、授業中に言葉一つ漏らさずに必死で聞いている。帰宅後のお手伝いの後、練習する。足し算を書いて消す。学期ごとに、試験がある。友達の家泊まって、ノートを書いた人から借りて勉強する。また、さらに感動したこと。ある時家に手紙が来た。市役所から来た手紙。「息子さん就学年齢」ですと、外国人であっても日本人であっても全員入学する義務(権利)ある。ビックリしました。昔からあること。入学すると空っぽのランドセルで行って、教科書いっぱいにして帰ってくる。

帰国して内戦勃発 自分を助けたのは・・・

ホームステイでは、アルファベットの世界から来たので、やるしかない。ひらがなの「あ」を書いたら、おばあちゃんが機嫌悪くなった。理由は、書き順がある。日本を作ってきた精神。書き順には厳しい。ひらがな・カタカナ。今は何とかなる。漢字はダメです。一生懸命、絵で描いて説明。意味わかってくれて言葉で返してくれた。話したいことを絵で描くと文にして返してくれた。きちんと二か月後に日本語話せるようになった。愛情たっぷり、厳しさほどほど。いい塩梅で。楽しかった二か月間。アパート暮らし。必ずルワンダに来てねと約束した。でも、約束を果たせなかつた。ルワンダ帰国二か月後に内戦勃発。1994年4月6日、普通の日でした。今日の夜で、今までの生活が送れなくなることを想像してください。その日は朝起きて仕事に行き、夕方終わってサ

ヨナラのあいさつ。三十人の仲間、今生きているのは五人。どんな死に方をしたのかもわからない。戦争の恐ろしさ。生活が止まってしまった。爆弾ミサイルの音。真っ暗になった。停電。電気は戻らなかった。ランプで三人の子供とご飯を食べた。怯える日々が始まった。何が起きているかもわからずに。七時間の時差。ルワンダで大変なことが起きていると日本から電話。大統領が暗殺された。大丈夫ですか。三日目は電話も通じない。切り捨てられた。夜間でも明るい。爆弾。朝、怯えて仕事に行く余地がない。音が聞こえたら殺されてしまう。「笑わないで」と子供に言う。これが実態です。一週間後隣に爆弾が落ちた。家を出る決心をしました。誰にも相談ができない。二歳児をおんぶ。四歳六歳、ハンドバックをもって。神様がいることを信じて。ハンドバックに蓄え。安全を求めて。でも、あるわけない。こんな光景を見たことがありますか。日本では避難所サポートしてくれる人はいます。でも、ルワンダでは歩いて、見ての通り、男の人どこにいますか。どこにもいません。駆り出されているんです。戦争は絶対にあってはならない。歩いて、歩き疲れたら横たわる。一人が座ると、人がいるから安心する。そこが難民キャンプ。病気が発生する。国際社会が来る。世界がつながっている。自分の命をかけて助けに来てくれる。三人の子供を助けるために走る。でも、子供は親を信じている。親に向かって「おなかすいた。」言われても、何もしてあげられない。横たわって動けないこれが現実。ハンドバックに5000フラン。パンが売られていた。賞味期限過ぎカビ。奇跡的に食べて歩き出した。ところが、難民キャンプで赤痢にかかった。難民キャンプで、「助けてください。」後ろから声がかかった。医師連絡協議会。災害が起きると先生が駆けつける。ひらがなを見た瞬間「通訳してくれますか」と頼まれた。「できる」と言った。ハンドバックの中に辞書が入っていた。テントに来られない人のためにも、言葉ができることは、日本の医師の助けになった。その後、先生から国会議員にたどり着いて、留学生ならば来られると、短期大学に受け入れてもらった。ハンドバックにパスポート。結婚していることや子供の名前書いてあることで、確認できる。日本に来ることができた。神様が導いてくれた。旦那は奇跡的に国境超える前に再会できた。1994年12月28日来日。難民キャンプから来たのは私たち家族だけ。留学生としての来日でした。安心して眠れた。日本に来て何にも恐れずに眠れたこと。本当に平和っていいな。当たり前ってというのが宝です。今日集まれるのも宝。孫にもひ孫にもこの平和がつながるように。この命を使って何かできるか。勉強したことが助けてくれた。学んだことがその人らしく生きられる。ルワンダに学校を作る。生活もままならないのに。でも、研修生で受け入れてくれた人が背中を押してくれた。あなたしかできる人いない。本当に教育は平和のカギ。ここで今の講演活動を始めた。十八年前、土台から始まって、二教室の学校。路上の子供も。「大きくなったら何になる?」に対して「私たちが大きくなるまで生きられるかな」が返ってきた。一か月後また聞いた。「大きくなたら先生になりたい」この夢一人一人つかんでもらおう。パソコン教室や夢を見ているうちに、福島が大変になった。避難所で、子供たちが私を見ると、興味はあるが反応は、「日本語しゃべった。」「えー、英語もしゃべれるの」子どもは、世の中をよくする笑顔の力を持っている。避難所通った。月一度仮設住宅にコーヒー紅茶をもっていった。みんなと楽しく過ごすことができるようになって千羽鶴をもって回った。三月十一日お祈りをした。

子どもたちの幸せを願って

夢が復活。給食室づくりができた。あれから18年、あの二教室から大きな学校ができました。180人が学んでいる。彼らたちこそルワンダを引っ張っている。女性の政治への進出。30%ある。世界でも多い女性議員。女性フォーラムができ、国自身が支えている制度。半分以上が閣僚の中で活躍している。また「アフリカの奇跡」とも言われています。日本の企業も支えている。首都から二時間離れると、一日の食事も食べられない子供がたくさんいる。子供はみんな教育を受ける権利がある。親のプライドを傷つけないで料理を食べさせたい。毎日必死で頑張っているのは何のため。子供たちがどこにでも寝られる場所を作りたい。子どもたちを脅かすエネルギーについて皆さんも考えてください。故郷に帰れないつらさを。みんなで考えましょう。安心して眠る子どもを作りましょう。ルワンダの大統領、大人気です。住民がおなかをすかしていたら神様の前に出られないと言っています。教育受ければ限りの無い可能性があるんです。歌のプレゼント。ルワンダの子どもたちの「フレンズ」。今日も生きていればよい明日が来る。次の世代につなげる人になりましょう。お布団に入るときに思い出しましょう。

(記録 山口哲司)

